

お茶の水女子大学

ピアサポート・プログラム報告書 第2号



2007年 3 月

お茶の水女子大学全学ピアサポート体制について

宮尾正樹

1. 全学ピアサポート連絡会議

全学ピアサポート連絡会議は、各学部及び国際教育センター（旧留学生センター）の学生支援活動の連絡機関、協議機関として2004年に発足した。所管が学務課から学生課に移り、連絡会議は学生支援室長と学生課長、学生課専門職員、各学部代表、国際教育センター代表をメンバーとして開かれることとなった。2005年度は文教育学部から宮尾正樹、生活科学部から伊藤重矢子、理学部から吉田裕亮、留学生センターから加賀美常美代の各教員、2006年度は文教育学部から宮尾正樹、生活科学部から藤崎宏子、理学部から吉田裕亮の各教員がメンバーとなった。

連絡会議で話し合われるのは、学生支援経費の予算要求と予算配分、全学の学生支援活動の協議であり、2006年度はそれに加えて、シンポジウムの企画が主たる議題となった。また、学生会館内に設けられたピアサポート活動用の部屋の使用内規を定めるなど、ハード面の充実も徐々にではあるが行った。

2. 第1回ピアサポートのための講演会とシンポジウム

本学のピアサポートはそれぞれの必要に応じた学生支援を各部局で行うのが中心であるが、全学的な連携体制が整って3年目に入った2006年度、これまでの活動を振り返り、活動をさらに展開していくために、全学ピアサポートとしてシンポジウムを開催することとした。その企画立案及び準備過程と、シンポジウムの実際については、本報告書のシンポジウム報告を参照していただくとして、これまで具体的な活動としてはほとんど連携がなかった本学のピアサポートがはじめて全学的な取り組みを行った意義をここでは強調しておきたい。また、ピアサポートの先駆的な取り組みを行ってきた広島大学の内野悌二先生に広島大学における活動について講演していただき、本学の活動に対してアドバイスをいただくことができ、本学における今後の活動に大きな示唆を得た。

当日の参加者が、実際にピアサポートに携わる教職員、学生を中心に約40人とやや少なかったことが残念であるが、その分実質的な情報交換、意見交換ができたのではないかとと思われる。同時に、各部局の活動の充実だけでなく、今後も同種の試みを行うことによって、ピアサポート活動に対する関心を学内的に喚起していく必要性も痛感された。

3. 今後の課題

本学の教育組織やカリキュラムがリゾーム化しつつある中で、学生に対する生活支援、学習支援体制の整備は不可欠である。本学のピアサポートは各部局の必要性に基づいて始まり、実施されており、今後もいっそうその方向での充実が図られなければならない。一方で、他の大学で行われているような、メンタルな面も含めた問題処理的な支援体制における学生の力の導入という点については、ほとんど取り込まれていないといってよい。今後の大きな検討課題と言えよう。

I 文教育学部

文教育学部ピアサポート活動報告(2005. 4～2007.3)

教授 宮尾正樹

(H18年度 文教育学部ピアサポート委員会委員長)

2003年より始まった文教育学部ピア・サポート・プログラムは、2006年度で4年目を迎えた。支援する側もされる側も自発的な意志に基づいて参加する活動を理念として出発したのであったが、新入生の大多数が参加し、多くのサポーターが必要となったこともあり、2005年度からは、新入生は全員プログラムに組み込み、サポーターは各学科、コースに人数を割り当てて選出する形になった。準備から実施まで、プログラムの運営がスムーズになった反面、プログラムを通じて学生の自発性を育み、広げていくという方向性が希薄になったことは否めない。

プログラムの実施方法は基本的には変わらない。一人の上級生（サポーター）と数人の一年生がグループ（P Sグループ）を作り、定期的に顔を合わせて、サポーターが新入生の相談に乗ったり、生活・学習上のアドバイスを行う。サポーターには教員のアドバイザーが付き、必要に応じて、サポーターの相談を受ける。プログラム全体の運営統括には運営委員会があたる。運営委員会は当初は有志の教員の集まりであったが、2006年度には、各学科から選出された教員で構成されることになった。

P Sグループの集まりの持ち方について、これまでサポーターから寄せられた声に基づき、複数のP Sグループでの活動を指導するようになった。サポーターのプレッシャーをやわらげ、必要に応じて他のサポーターに助言を求められるという効果を上げたと思われる。

文教育学部のピア・サポートはプログラム開始時から、新入生の大学生活への適応支援という点では一定の成果を上げているが、支援された側が翌年以降自発的に支援する役割を果たすように支援の輪をつなげていく風土が醸成されつつあるとは言い難い。本取組は昨年4月、読売新聞に紹介された他、雑誌にも筆者執筆の事例紹介が掲載され、外部に対しては一定のプレゼンスを得たと言えるが、活動の実質がそれに見合ったものであるかを振り返ると内心忸怩たるものがある。今後実施方法を工夫していく必要があると思われる。

文教育学部ピア・サポート・プログラム実施記録

2005年度

4月7日 サポーター説明会

4月8日（12日） P Sグループ顔合わせ

4月15日 懇親会

2006年度

4月6日 サポーター説明会

4月7日 PSグループ顔合わせ

4月14日 懇親会

(参考資料)

「新入生にサポーター」『読売新聞』2006年4月5日

宮尾正樹「学生同士で支援の輪をつなぐ——お茶の水女子大学文教育学部のピアサポート・プログラム」『大学と学生』第29号、独立行政法人日本学生支援機構、2006年6月。

Ⅱ 生活科学部

生活科学部ピアサポートの取り組みと成果

教授藤崎宏子

(H18年度 生活科学部ピアサポート委員会委員長)

1 平成17年度の活動

生活科学部におけるピアサポートの取り組みは、平成16年度からスタートした。このため、2年目にあたる平成17年度は、学生側・教員側の本事業に対する理解が深まり、前年度の実績と経験を踏まえて余裕をもって活動に取り組めた。

第1回委員会は5月27日にもたれ、まず各学科・講座の活動実績及び活動計画の報告があった。続いて、7月に予定している学生実行委員交流会の持ち方につき話し合われた。

7月7日の学部ピアサポート学生実行委員交流会には、各学科・講座の計28名の学生実行委員が参加した。戒能学部長のご挨拶に始まり、教員側委員6名も交えて、各学科・講座の取り組みに関する学生委員の報告や情報交換がおこなわれた。また交流会終了後には教員側委員により第2回委員会がもたれ、交流会の反省会と今後の活動に関する確認などがおこなわれた。

第3回委員会は11月18日にもたれ、各学科・講座委員より、年度半ばの段階での活動報告がなされた。17年度は報告書を作成しないが、代わりに大学HPに学部ピアサポートのページを作成し、各学科・講座の活動紹介記事を掲載することを決定した。

年度末の3月30日に第4回委員会がもたれ、1年間の活動の反省と次年度への引き継ぎ等が話し合われた。

なお、平成17年度の委員会構成は、以下の通りである。

委員長：伊藤亜矢子

委員：藤原葉子(食物栄養学科)、大瀧雅寛(人間・環境科学科)、柴坂寿子(人類科学講座)、浜口順子(発達臨床心理学講座)、杉田孝夫(生活社会科学講座)、宮内貴久(生活文化学講座)

2 平成18年度の活動

今年度は教員側委員の大半が交替し、新たに再スタートを切ることとなった。6月2日に第1回委員会がもたれ、伊藤委員長より任務を引き継いだ藤崎委員長より、過去2年間の活動につき簡単な紹介がおこなわれた後、今年度の活動方針を話し合った。例年通り、7月上旬に学部ピアサポート学生委員交流会をおこなうこと、日常的な活動は各学科・講座の独自性を活かしておこなうこと、デジカメなど共有財産の確認と使用ルールなどにつき話し合われた。

第2回委員会は、7月4日にもたれ、同月7日に予定されている学部ピアサポート実行委員交流会の事前準備について最終確認をした。併せて、6月28日におこなわれ全学ピアサポート連絡会での連絡事項、協議事項につき、藤崎委員長より報告があった。

7月7日に開催された学部ピアサポート実行委員交流会には、33名の学生実行委員（食物7、人・環4、発臨6、生社10、生文6）、6名の教員側委員が参加した、御船学部長よりピアサポートの意義についてお話があったあと、各学科・講座の取組について発表があり、質疑応答がなされた。教員側委員のカンパによる茶菓も用意され、終始和やかな雰囲気のうちには進行した。参加者にはアンケートに回答してもらったが、その意見傾向は以下の通りである。

- 1) 交流会に参加しての感想：他学科・講座の活動例が参考になった、よいアイデアは自分たちの活動にも取り入れていきたいなど、ほぼ全員が肯定的なコメントをしていた。
- 2) 今後の交流会のもち方への要望：時間帯は遅すぎるという意見もあったが、授業等の関係でやむをえないという意見が大勢を占めた。各学科・講座ごとのまとまりで着席して会を進めたことに対し、学科・講座を越えた交流を進めるためには立食形式が望ましいという意見もあった。開催頻度については、年1回が適当であるという意見が多数派を占めるものの、もう少し回数を増やすことを望む声も4分の1程度あった。なお、会の開催自体を疑問視する意見も、1、2あった。
- 3) 日常的活動で困っていることや要望：学年を超えた交流をもとうとしても、人数が多すぎて日程調整や場所の確保が困難、学生から会費を徴収しているが、わずかでも活動費の補助があるとよい、メーリングリスト等で連絡を回すけれど、情報伝達が十分でない、活動への参加意欲の面で学生間に温度差がある、などの意見があった。

交流会修了後、教員側委員は第3回委員会をもち、反省会をおこなった。交流会を次年度以降も継続的におこなうことが望ましいという基本方針を確認し、頻度としては年1回、時期は年度始めが望ましいが現実的には困難というのが教員側に共通する見解であった。交流会以外の学科・講座を超えての交流は現実的には難しそうだが、参加可能なイベントなどがあれば、情報を流すなどの対応をすることも今後の課題として提起された。

3. 反省と課題

過去2年間の実績と経験をもとに活動ができたため、委員会運営に関しては、ほぼ大過なく終わることができた。日常的なピアサポート活動については、各学科・講座とも独自性を活かして活動に取り組んでおり、安定的に運営されているといえる。予算や活動場所の確保、学生内の関心の個人差への対応、情報伝達体制の確立などが今後の課題である。

食物科学講座ならびに食物栄養学科ピアサポート報告

助教授池本真二

(生活科学部・食物栄養学科)

概要

ピアサポートとは何か？ 実行委員の共通理解のないままの状況からスタートしたが、本学科ではピアサポートと称する以前から学生による学生生活支援活動は伝統的に受け継がれているものがある。そこに、新たな取り組みとしてその年度に新たに加えていく、あるいは新たな活動に変えていく形で運営されているといえる。従来から行ってきた学生同士が主体となって行う活動としては、徽音祭における1、2年生共同のお汁粉屋、4年生による3年生に対する研究室紹介、また、教員を含めた学生の支援活動としては2、3年生主体の在来生セミナーやインターンシップ報告会、3年生による卒論発表会の運営がある。今回新たに加わった活動として、**Ochas** と称した一種のサークル活動のような社会活動がある。学生がピアサポートと構えることなく、自主的に作り上げた活動が生まれ、新しい学科の1期生である3年生が新たな息吹を吹き込んでいるように感じられた。学校で学んだことを実践の場で生かすこと、自己実現、自己の向上心とを目的に作り上げた活動である。3年生から2年生に、そして1年生へとその輪を広げるための懇親会（活動報告会）も開かれた。また、2年生が中心となって、新入生の歓迎懇親会を開催し、1・2年生の交流を深めることができた。しかし、本年度は、学生のニーズが高いにもかかわらず、就職・進学活動に関する報告会を開催できなかったことは、今後の課題と考えている。以下に活動内容の詳細とその効果について概説する。

従来 of 活動

・在来生セミナー（9月）

2、3年生を主体とし、ほぼ全員の教員が参加して、一泊の研修旅行を行っている。御殿場の国立中央青少年交流の家に一泊し、学生（2～4年生）46名、教員13名の規模で行われ、スポーツ大会、懇親会、自然農法の農場見学および健康科学センターの見学であった。農場見学は、管理栄養士として食材を知ることの重要性と農産物がどのように作られているか、また新しい農業、特に自然農法の考え方を知ることには大いに意義深いものであったといえる。巷では食育が注目される中で、食べ物と健康について、学生が自ら考える力をつけるきっかけになったと考えている。また、スポーツ大会および懇親会を行うことで、学生相互のそして教員と学生間の懇親、相互理解が深まったと考えている。泊りがけで行うことで、日常の大学生活だけでは得られない深い討論や相談がなされた。懇親会では、4年生が参加することで、就職活動や研究室に関する情報を得る恰好の場となっている。

る。

- ・4年生による3年生に対する研究室紹介（10月中旬ごろ）

教員による研究室紹介とは全く別に、学生同士で研究室紹介を行っている。本年度は11月から12月にかけて3年生と4年生の間で催された。研究テーマの説明だけでなく、研究室の雰囲気や教員のパーソナリティなどが紹介される。学生が卒業研究の研究室、教員を選ぶときの大きな手助けになるようである。なお、教員による研究室紹介は別途行われている。

- ・徽音祭における1、2年生共同のお汁粉屋（11月）

高品質のお汁粉（ときわじりこ）の作り方が上級生から毎年引き継がれている。お汁粉を作り、饗するという作業を通じ、食べ物を作り売るという過程を実感されるとともに、ある種の「もてなしのこころ」を体験する場となっている。さらに、学生の共同作業を通じ自主性や協調性が涵養され、また学生交互の懇親が深まっている。

- ・インターンシップ報告会（12月）

3年の夏休みを利用して、民間企業ならびに国立の研究機関等におけるインターンシップを体験するが、その内容を1・2年生に伝えることも一つの目標として報告会を開いている。学生による進行、学生の報告、後輩からの質問と、自ずと学年を超えた連帯感が生じているように思える。本年度は、新規活動である Ochas の懇親会と連動して開催したことから、1年生の参加もあり、本館 309 室が満席状態となった。

- ・卒業論文発表会（2月）

これは学科の公式行事であるが、会場の設営、会の司会などの運営を3年生が行っている。

- ・卒業生を送る会（3月）

3年生がこれまでに習得した調理技術を披露する場として、また4年生に対する感謝の意を表して、一日がかりでフルコースを作り饗することを恒例行事としている。教員も招待され、学生間だけでなく学生と教員間の親睦にも一役担っている。

本年度の新規活動

本年度は新たに食物科学講座ならびに食物栄養学科ピアサポート活動として、2年生による新入生歓迎会、食物栄養学科1期生である3年生が立ち上げた Ochas の引継会（懇親会）が開かれた。

新入生歓迎会は、新入生セミナーの2年生主催版と考えればよい。ピアサポート学生実行委員会開催前に、2年生自らが1年生の時に先輩との交流が少なかったとの思いから、自主的に4月18日に開催したものである。参加者は1・2年生合わせて約42名で、授業終了後17時～19時頃まで、お菓子を食べながらそれぞれのテーブルで自由に歓談し、その後八王子セミナーのときのように全員でゲームをするなど、親睦に努めた。これまでは、

徽音祭のお汁粉まで交流がなかった1・2年生の顔合わせ会になったようでスムーズに徽音祭を迎えることができたようである。1年生にとっては、入学早々の先輩との繋がりができて好評だったと聞いている。

Ochas は、1期生である3年生が自ら、大学で学んだことを社会活動に生かしたい、あるいは活動を通じて自己研鑽につなげたいという思いから生まれた。現在、スイーツ、お茶ファーム、ピンクリボン、お茶づくり、ナーサリー、食プレ（勉強会）、から成る。スイーツは、企業と連携してお菓子を作りたいという活動である。「お茶大ゴーフル」に替わる新作ができることを期待したい。お茶ファームは、「farm to table」を実現させる活動といえる。ボランティア活動として学内の草むしりから始まり、このことが評価されて小さいながらも学内に農地（畑）を獲得した状況で、今後の活動に期待したい。今年は、学内で育てている梅（実際には、学内で手に入らず、購入）とびわを用いて梅酒・びわ酒づくりに挑戦したようである。ピンクリボンは、乳ガン早期発見啓発キャンペーンへの参画。お茶づくりは、有機農法にこだわったお茶屋さん協力して頂きお茶大限定茶の作成。10月上旬に完成し、オープンキャンパス、130周年記念式典、徽音祭で販売という実績を残してくれた。ナーサリーは、お茶大保育園であるいずみナーサリーでのおやつ作りというボランティア活動である。最後に食プレ（勉強会）は、食の知識を深め、プレゼンテーション能力をたかめることを目的に作られた勉強会である。唯一2年生が主体となって動かししている。1年から3年まで参加して動き始め、発表者の確保が大変そうだが、自主的な勉強会として頑張ってもらいたいものである。

学生実行委員の活動

最後に、委員のメンバーとその活動を示しておく。

1) 平成18年度食物科学講座ならびに食物栄養学科ピアサポート実行委員顔合わせ会

(6月30日(金) 12:30~13:00 本館2階202室)

ピアサポート担当学生：1年生 今井 愛、辻 望

2年生 増本歩美、山越美歩

3年生 片野 佑香、戸崎 智子

4年生 市川 瑠璃子、奥山 綾子

平成18年度ピアサポート担当教員：2年生担任(池本 真二)

ピアサポートの考え方、本年度の活動の予定等を確認した。

2) 学部ピアサポート実行委員交流会

(7月12日(水) 18:00~19:30 本館103室(学部会議室))

他学科、他講座の活動を知ること、ならびにメンバーとの交流ができたことは非常に良かった。ピアサポートって、結局何をやって良いのか具体的にイメージが取りづらかったようで、先輩達の報告を聞いて、理解が深まったものと考えている。

Ⅲ 理学部

理学部の学生支援の現状

教 授 古 田 裕 亮

平成 16 年度より理学部の各学科に、学生支援担当教員を配置し、必要に応じて会合し、各学科での学生支援活動の情報交換を図る体制を整えた。前回と同様に、理学部各学科での学生支援の取り組みの現状を取りまとめることにより、今後の学生支援の活動に資すことにしたい。

理学部の全学科が全学共通の体制である学年担当教員の配置を行なっているのは、もちろんである。また、理系の特徴でもあるが、全学科で研究室体制を取っているため、4年生以上の学年に対しては、指導教員による学生支援はもちろんのこと、上級生から下級生、あるいは同級生の間での学生相互の、いわゆるピアサポートも実質的に従前から行なわれている。最近では3年生以下の学年に対しても各学科での独自の修学や大学生活に関する学生支援の取り組みが見られるようになってきた。このような現状や新たな取り組みを報告書としてまとめることにより、学科間で参考とし今後の学生支援活動の充実を図りたい。

以下に、理学部5学科（数学科、物理学科、化学科、生物学科、情報科学科）での学生支援の体制と具体的な取り組みに大別してまとめた。

理学部・数学科における学生支援の現状

教授横川光司

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

学年担当教員制であるが、各学年に教員を補導教員として1人ずつ割り振り、その学年の言わば担任の役割を果たしている。補導教員は1年任期である、学生側から見て、なるべく多くの教員を補導教員と出来るように毎年割り振りを変更している。また、就職・卒業の年である4年生に対しては、学科長が補導教員を担当することになっている。

● スーパーヴァイザー制

数学科では1998年度からスーパーヴァイザー制を導入した。この制度は、1年生から3年生までの各学年において、学生2人ずつに1人の教員をスーパーヴァイザーとして割り振って、きめの細かい支援を行うものである（各学生に対するスーパーヴァイザーは入学式の日に表示され、3年間変わらない。また、学年の人数によっては、例外的に1人の教員に3人の学生が付くことがある）4年生になれば、学生け数人ずつに分かれてそれぞれ1人の教員を指導教員として、きめ細かな指導を受けることになるが、入学から4年生になるまでの間は、補導教員の存在だけでは、4年生に対して指導教員が行うような学生支援は受けられない。そこで考えたのか、このスーパーヴァイザー制である。スーパーヴァイザーとしてどのような学生支援を行うかは、各教員に任されており、何か問題が起きたときに適切な対応をするほか、例えば、各種相談に応じたり、学生の要望に応じて自主ゼミの支援をしたりしている。これは少人数教育の利点をフルに活かしたものだといえる。

2) 学生支援行事

● 新入生懇談会（4月）

4月の入学式後に、新1年生、編入学生および教員との顔合わせ、学生による自己紹介および教員からの自己紹介および学生生活へのアドバイス等を行っている。

● 新入生セミナー（4月）

ここでは、入学して間もない1年生に対して、新入生どうし、そして新入生と教員や上級生との親睦をはかり、また、大学での学習についてや授業履修上の注意点等について伝え、以後の大学生活への不安を軽減する努力をしている。

● 3、4年生合同親睦会（11月）

3・4年生向けには、毎年秋に懇談会を開いている。懇談会は、4年生から3年生へ、就職活動のこと、大学院進学のこと、4年生が行っている各ゼミの様子などを伝える場になっている。また、毎回ゲストとして、大学院生と卒業生の何人かに来てもらい、進学後の状況、就職後の状況について3・4年生に話をしてもらい、今後の参考にしてもらっている。

理学部・物理学科における学生支援の現状

教 授 冨 永 靖 徳

1) 学生支援体制

● 学年担当教員および就職担当

物理学科の公式の学生支援システムは、本学が採用している補導教員（学年担当）のシステムである。1年生から3年生までは担当教員の持ち上がり、4年生は就職係が担当している。学年担当教員は学生の学習や大学生活上の問題についての相談相手になっている。担当教員は、入学式後の物理学科ガイダンスで周知させているが、必ずしも学年担当でない教員にも気軽に話をしに行ってもよいことを同時に周知させている。

● 学生支援ティーチングアシスタント

全学共通と同様の体制を敷いている。

2) 学生支援行事

● 新入生八王子セミナー

4年間に履修するカリキュラムについての解説と専門科目間のつながりについて解説を行っている。

● 在来生合宿研修セミナー

10月下旬2泊3日で、「草津セミナーハウス」で研修を行っている。主に物性関係の院生（修士）の研修であるが、4年生の参加も開かれている。

● 3年生の研究室配属指導

3年生の物理学特別講義V（選択、2単位）では、数名ずつの学生を研究室に配属している。この科目の目的は、早い時期に研究室での研究の様子を眺めさせ、簡単な研究課題を進める事によって、卒業研究への展望の材料にするとともに、就職活動に際の面接等にも役立つためである。教室とは異なるコミュニケーションがとれるので、学習だけでなく大学生活に関する問題に関してもよい効果が出ている。

● 4年生の卒業研究

4年生は卒業研究のために数名ずつ各研究室へ配属される。発表に向けて課題に真剣に取り組む事で、はじめて、物理の面白さに目覚める学生が多い。レポートを書く段階で、文章の教育、プレゼンテーションのやり方等、講義では出来ない教育がなされている。教員

のみでなく研究室のすべての構成員とのコミュニケーションがあるので、大生活上の問題についても、自然な形で解決の糸口がつかめているように思われる。

理学部・化学科における学生支援の現状

教授益田祐一

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

学年担当教員：(各学年ごと主、副、計2名うち、1名は継続性を配慮して原則学年ごとに持ち上がり)

● スーパーバイザー制

1年生から3年生までの学生を対象に、化学科の教員(助教授以上:H18年度12名)一人あたり2~3名を割り当て、その学生の修学状況や相談にのる制度を作った。特に、留年生や不登校の学生に対しては、教室会議などでの協議も含め、より適切な措置講じることが可能な体制を構築している。

・飛び級・大学院9月入学の推奨(H18年度1名適用)秀逸な学生に対し実施。修学期間の短縮による経済的なメリットや、多様なキャリアパスの可能性を開くシステムとして有用。

・桜化会 OUCA(化学科・関連大学院の卒・修了生と現旧教員でつくる会)への在学生の加入:就職情報の提供、講演会の開催など。H18年度から、在学生にも加入を可能とした。

2) 学生支援行事

● 新入生と教員の談話会

新1年生、編入学生およびその父兄と化学科教員との顔合わせ。学科(大学院も含む)に関する全般的説明、学生による自己紹介および各教員からのメッセージを直接伝える機会となっている。

● 新入生セミナー

大学あるいは学部共通行事の他、1年生担当教員から化学科の教員紹介ならびにカリキュラム説明および、4年生交えた履修、大学生活などについての相談、意見交換の実施。

● 化学科研修会(オリンピック研修センター) H18年度12月1、2日(1泊2日)

8年前から実行している化学科教員、学生全員参加が原則。卒業研究、大学院進学のための研究室紹介(教員、4年生担当)、卒業後のキャリアガイダンスを主眼とした卒業生による講演会。H18年度:旧国立系研究所研究員、企業研究開発在職者による講演と懇談会を

実施。

- ・博士前期課程 1 年生による研究の中間報告会：大学院への進学をエンカレッジするために学部学生の参加を奨励。学部学生に大学院での研究を実感として伝えることに寄与している。

- ・研究室紹介（1 月）：卒業研究履修生に対する各教員の研究紹介。学生の希望と各研究室の研究のマッチングをはかるものである。

- ・その他：卒業生による講演会、企業、官庁などの説明会（6 件）など。

理学部・生物学科における学生支援の現状

講師近藤るみ

1) 学生支援体制

● 学年担当教員

生物学科の学生支援体制の中心は、補導教員（学年担当）システムである。1年生から4年生まで一貫して一人の教員が持ち上がりで担当し、各学生の情報を把握し、学習や大学生活における指導を行っている。

● 学生相談員

女性教員である西川（助手）が学生相談員として、学習や大学生活に関する相談にのっている。

● 学生支援ティーチングアシスタント

博士前期課程の大学院生が学生支援のTAを行っている_新入生セミナーに同伴し、時間割の立て方、学生生活の相談にのっている。

2) 学生支援行事

● 新入生懇談会

4月の入学式後に行う、新1年生、編入学生およびその保護者と生物学科の教員との最初の顔合わせの場である。学生による自己紹介、教員からの自己紹介および大学生活へのアドバイス等を行っている。

● 新入生八王子セミナー

八王子セミナーハウスで、1泊2日の新入生セミナーを行い、学習や大学生活に関する心構えを教えている。新入生はTAの支援を受けながら時間割を作成する。教員やTAは、大学生活の様々な相談にしのっている。新入性同士の親睦を深める大変良い機会にもなっている。

● 学生懇親会

生物学科の4年生が手作りの料理により、1、2、3年生をもてなす懇親会である。3年生にとっては、先輩から研究室の情報を聞く良い機会でもある。

● 卒業研究

卒業研究は必修科目ではないが、9割以上の学生が卒業研究を履修している。各研究室に

数名ずつの学生が配属し、学生は毎日研究室に、各自の研究課題に取り組む。研究室のゼミでは、英語の論文等を読んで紹介し、質疑応答を通してその指導を受ける。2月の卒研発表に向けて真剣に研究に取り組むことによって、初めて生物学の面白さに目覚める学生も多い。研究室の構成員とのコミュニケーションを通じて、日常的に、大学生活や進路選択の支援を受けることができる。

3) その他

1年生後期から学生実験が始まるが、実験の合間や終了後には、担当の教員とTA(院生)と気軽に話せる雰囲気があり、学生から学習や将来の進路に関する相談を多く受け、指導を行っている。千葉県の館山市にある湾岸生物教育研究センターでは、宿泊を伴う実習を行っており、学生同士や教員と学生の交流を深める機会ともなっている。

理学部・情報科学科における学生支援の現状

教授 吉田裕亮

1) 学生支援体制

● 学年担当

各担当教員は、担当学年の学生の情報を把握し、学習や大学生活上の問題についての、主な相談相手になっている。特に、1年生の担当教員は大学生活のスタートで、何かと不安持つ学生やつまづきかける学生が他の学年よりも多いため、より多く1年生に接する機会がある1年生への必修科目担当の教員を配置するようにしている。

● 就職担当教員

情報科学科では就職担当の教員を配置して学生の就職への支援を強化している。就職担当教員は学科への求人会社との窓口であると同時に就職希望の学生の就職へのアドバイザーとしての重要な役割りを果たし、学生の社会進出の支援を行っている。

2) 学生支援行事

● 入学式後の懇談会および新入生セミナー

入学式後に、学生による自己紹介および教員からの自己紹介および学生生活へのアドバイス等を行っている。また、後日の1泊2日の新入生セミナーにおいては随伴の教員のみならず、上級生も同行し新入生の学習や大学生活に対する説明を行っている。特に、ここでは学科のカリキュラムの説明と共に履修指導を行っている。同行学生からは大学における勉学の方法、さらには、各研究室での研究・教育の紹介も行う。また、1泊2日ながら寝食を共にすることにより、新入生同士の親睦を深める重要な機会にもなっている。

● 在来生合宿研修

毎年、情報科学科の3年生に向け進路ガイダンスとしての1泊2日の合宿研修をおこなっている。3年生ならびに教員は原則全員参加で、さらに各研究室より学生を同行し3年生への研究室紹介も行っている。

平成18年度は幕張にある財団法人海外職業訓練協会(OVTA)で行った。教室主任からは進学ガイダンス、就職担当教員からは学科としての就職ガイダンスも行い。毎年、3年生からの意見によれば、非常に有益な行事であるとの結果を得ている。3年生どうし、ならびに上級生との更なる親睦も深まるようで学生間の相互支援に大きな成果を得ている。

人間・環境科学科および前身講座（生活工学講座&人類科学講座） の学生ピアサポート活動報告

助教授 大瀧 雅寛（人間・環境科学科&生活工学講座）

助教授 柴坂 寿子（人類科学講座）

人間・環境科学科ならびに生活環境科学科生活工学講座および人類科学講座は、学生の自主性を尊重し、主にその勉学および進路に関して相談に乗り支援するとともに、学生に対する公平性を保ちつつ、より良い教育環境作りに努力してきた。2005年度および2006年度のピアサポート活動は下記の通りである。なお人類科学講座および生活工学講座については、主な活動は2005年度までである。

【学生との間の連絡方法の確保】（人間・環境科学科が該当）

学生と教員との間で連絡をスムーズにかつ、情報保護に関するトラブルを生じさせないように、メールシステムによって行う体制を確立した。

1. 本学科学生に、本学科「教員の公的メールアドレス（@cc.ocha.ac.jpもしくは@ocha.ac.jp）」を周知させている。本学科学生は、勉強内容に関する質問を本学科教員の公的メールアドレス宛メールにて行なうことができる。この制度は教員にとっては負担ではあるが、学生により頻用されている。
2. 本学科教員は、本学科「学生の公的メールアドレス（@edu.cc.ocha.ac.jp）」を把握している。

教員は学生の公的メールアドレスを介して迅速・一律に公的情報を傳達することができる。ただし送信内容は常に公的情報に限り、かつ必ずいかなるメールもクラス学生全員宛に同じ文を同時に送信しなければならないこととしている。これは厳密に守られなければならない。学生は、「学生の公的メールアドレス（@edu.cc.ocha.ac.jp）」から、WebMailを使って、「自分の私的メールアドレス（@docomo.ne.jpや@ezweb.ne.jpなど）」に、メールを転送することができる。本方法にて、学生の事務登録締切などに関する注意を時宜適切有効に行ない、幾多の事務面における手続締切日に関する忘却から学生を救った（特に教育実習手続など）。

なおこのシステムに関しては、1年次のコア必修科目「情報処理演習（生活D）」において周知徹底させているため、学生には漏れなく伝わっている。

【学生の進路選択に関する支援】

1. 3年次研修旅行と学生への進路・就職に関する説明会（生活工学講座が該当）

生活工学講座では、2005年7月上旬、3年生とともに鎌倉に行き、逗子にて一泊して、進路・就職に関する説明会を行なった。

2. 4年生と教員による研究室紹介と進路相談会（人類科学講座が該当）

人類科学講座では、3年生の研究室決め、および就職に関する情報の提供のために、教員のサポートの元、3年生が企画・運営し、4年生及び教員による情報交換を行った（2005年度は10月7日（金）、10月18日（火）に開催）。

3. 就職説明会（人類科学講座が該当）

人類科学講座では、就職に関する情報交換のために、教員のサポートの元、3年生が企画・運営して、卒業生による就職説明会を開催した（2005年度は11月30日に開催）。

4. インターンシップ制度の推進（人間・環境科学科および生活工学講座が該当）

人間・環境科学科では、3年次におけるインターンシップをカリキュラムに組み込んで推進している。これにより学生の就職後の進路決定において重要な指針となりうる。本年度の参加状況は次のとおり。

2006年度参加者：人間・環境科学科3年生 計6名、実習期間：2週間（10日間）

実習先：東京都下水道局，東京都水道局，東京都庁環境科学研究所，財）化学物質評価研究機構，東京医科歯科大学生体材料工学研究所など

5. 卒業論文中間発表会（生活工学講座・人類科学講座が該当）

生活工学講座では毎年11月中旬に、卒業論文中間発表を実施しており、発表する4年生のみならず、1年生から3年生まで参加して、その将来の進路選擇の参考に供している（2005年度は11月14日（月）に行なった）。卒業論文中間発表要旨集を3年生以下に配布し、自分の興味・関心のある研究テーマを選ぶきっかけとした。これは研究室選りにおいて大いに役立った。

人類科学講座では毎年7月下旬に、生活工学講座と同様の卒業論文中間発表会を開催している（2005年度は7月27日（水）に開催）。卒業論文中間発表要旨集を配布し、3年生にとって研究室選りの情報源となっている。

【新入生への履修方法などの説明支援】（人間・環境科学科が該当）

入学式直後に八王子セミナーハウスにおいて新入生オリエンテーションを行なった（他学科・他講座と同様）。特に当学科では、生活科学部「履修の手引き」の人間・環境科学科の欄において「履修モデル時間割」を示すことで、履修漏れの恐れがないよう細かな指導に役立てている。（写真参照）

【学生と教員，ならびに，学生間の親睦に関する支援】（人間・環境科学科が該当）

大学生活に少し慣れた5月上旬に教員主催の新入生歓迎BBQ大会を行ない，教員と学生の親睦を図った。（本年度は6月19日（月）に行なった。写真参照）

発達臨床心理学講座におけるピアサポート活動

助教授 刑部 育子

(生活科学部・発達臨床心理学講座)

ピアサポート活動の位置付け

発達臨床心理学講座における学生支援・交流活動は大きく 3 つある。(1) 新入生オリエンテーション合宿時による教員・先輩からの授業カリキュラム作成のアドバイス、大学生活に向けての導入サポート、(2) 3 年次発達臨床心理学講座合宿によるゼミ紹介、懇談会、(3) 学生同士の運営によるピアサポート活動である。

(3) のピアサポート活動は (1) ~ (3) の活動流れの中に位置づいており、学生の自主的運営により有効に機能している。とくに進路相談・就職活動においては、OG 訪問の他、メールによる質問アンケートの実施、情報のファイルへの蓄積・共有化などきめ細やかな活動が行われている。学年を超えた情報交流の環境が学生自身の手で構築されている。以下では、本年度行ってきた講座の活動を (1)・(2) の簡単な紹介も含めて示し、(3) については実施内容を詳細に報告する。

(1) 新入生オリエンテーション合宿(1 年次 4 月)

新入生オリエンテーション合宿では、仲間と親睦を深めること、大学の授業のとり方、単位の取り方、時間割の組み立てなどのサポートを行っている。教職(幼稚園教諭・小学校教諭・家庭科教諭)をとった大学院生がアドバイザーとなり、授業時間割を一緒に作成、考える機会となっている。ここでの教員の役割は、学生同士が話し合える場・雰囲気を作ることであり、大学院生は 1 年生同士がゆっくり時間をかけて仲間と関われるよう、また疑問を率直に語れるようファシリテーター役に努めている。

(2) 発達臨床講座 3 年次合宿(3 年次 5 月)

3 年生になると発達臨床心理学講座では 1 泊 2 日の合宿を 5 月に行う。合宿のサポート役として活躍してくれるのは各ゼミの院生たちである。3 年生ともなるとゼミのこと、卒業論文のこと、卒業後の進路を考える時期に入る。合宿時には院生が企画したゼミ紹介、楽しいグループワークの他、小グループで先輩達や講座全教員とじっくりと話し合う機会をもつ。3 年次合宿は学部後半 2 年を過ごす節目として貴重な機会となっている。3 年次には編入生数名が新たにこの講座に加わることもあり、編入生がこの講座を知るよい機会になっている。

(3) 発達臨床講座ピアサポート活動(全学年による学生交流)

ピアサポート活動は学年を超えた学生同士の活動として実施されている。新入生の時間

割相談会や懇親会に加え、進路・就職活動への生の情報を OG から得る。必要な情報を得、共有するために、一年を通して調査の実施時期や方法を学生自身がよく考えて編成している。自分達が後輩のときにしてもらったことを先輩になったときに今度は後輩に伝えるという循環サイクルが、各学年のピアサポート委員を中心に作り出されている。

平成 18 年度ピアサポート活動実施内容 【 】はピアサポート委員担当学年

- 4 月 新入生時間割相談会 前任ピアサポート委員担当
- 5 月 16 日 新任ピアサポート委員の顔合わせ (会計・書記 各学年 1 名ずつ)
- 5 月 26 日 発臨 1～3 年 活動費 100 円を回収し持ち寄る。
- 6 月 進路アンケート第二部実施 (平成 17 年度卒業生対象) 【2 年】
(3 月に第一部に回答いただいた OG へ実際に進路に進まれてからのことについて質問。メールでやりとり)
- 7 月 6 日 いずみナーサリーOG 訪問 【3 年】
ピアサポート委員 3 名で訪問
- 7 月 11 日 進路懇親会 (企業) 【2 年】
昼休み 123 教室にて 1～3 年生約 30 名参加
企業内定を受けている 4 年生の先輩による就職活動についてのお話
→ その後、詳しい個人相談につなぐ
- 7 月 12 日 生活科学部ピアサポート委員交流会
- 8 月 企業・幼稚園にすすまれた OG の方へメールにて相談
(訪問日程調整が難しかったため)
- 9 月 25 日 東京大学大学院 OG 訪問 【3 年】
ピアサポート委員 1 名、三年生 4 名、合計 5 名で本郷キャンパスへ訪問
- 10 月 13 日 発達臨床心理学講座交流会 【1 年】
17:00～ 306 教室にて 1～3 年生約 12 名参加。
お茶を飲みながら授業、アルバイト、ボランティアなど学年を超えて情報交換
- 10 月 27 日 進路懇親会 (院・公務員・教職) 【2 年】
17:00～ 306 教室にて 1～3 年生約 20 名参加。
企業以外の進路を選んだ 4 年生から話をきく。小グループに分かれて質問タイム
- 11 月 22 日 ピアサポートシンポジウム 3 年生 2 名が登壇
- 3 月 予定 進路アンケート第一部実施 (平成 18 年度卒業生対象) 【1 or 2 年】

生活社会科学講座ピアサポート活動報告

教授 石井クンツ昌子
(生活科学部・生活社会科学講座)

1. 活動までの準備

2006年6月より藤崎宏子教授の生活科学部ピアサポート委員会委員長就任に伴い新たに石井クンツが生活社会科学講座のピアサポート委員に就任した。6月から本格的な準備と活動が始まったためにこの委員交替はスムーズに進んだ。生活社会科学講座では、5月～6月に各教員に依頼してピアサポート実行委員を募った結果、一年4名、二年4名、三年4名の実行委員が選出された。6月21日に藤崎教授、担当教員も交えて第一回ピアサポート実行委員会を開き、今までの活動や本年度の活動方針と計画について話し合った。

この実行委員会では以下の活動方針が確認された。

- (1) 意識的に学年を超えての交流の機会を多く持つこと。
- (2) 生活社会科学講座ピアサポートのメーリングリストを作成して、実行委員間と担当教員との緊密な連絡の場にする。
- (3) 生活社会科学研究会シンポジウムをピアサポート事業の一環とすること。
- (4) ゼミに関するインフォーマルなオリエンテーションとガイダンスを開催すること。
- (5) 卒業生へのアンケート調査をすること。
- (6) 一年を通して情報交換の場を提供すること。

2. 活動の経過

2006年度の活動経過（一部予定を含む）は、以下の通りである。

- 2006年6月21日 **第一回実行委員会**（内容は上記のとおり）
- 2006年7月12日 **生活科学部ピアサポート学生実行委員交流会**への参加
- 2006年7月26日 **第二回実行委員会**
7月末に行われるピアサポート交流会についての話し合いと計画をした。初顔合わせということもあり、インフォーマルな学年を超えての会にするために、茶菓子とドリンクを用意することや各学生には軽い夕食程度のものを持参してもらうことなどを決めた。
- 2006年7月28日 **生活社会科学講座ピアサポート交流会**

18:30～20:30 生活科学部本館315号室

参加者は30名程度であったが学年を超えての交流を茶菓子を食べながら楽しんだ。テーマは決めずに自由におしゃべりをしてまずは顔や名前を覚えることなどを目標としたが十分この目標に到達できたと思う。

- 2006年10月11日 **第三回実行委員会**

10月18日に行われる就職活動報告会後のピアサポート交流会についての計画をした。軽食の注文や飲み物、茶菓子の購入の分担についても詳細に決めた。

- 2006年10月18日 **生活社会科学講座就職活動報告会・ピアサポート交流会**

16:40～18:30 **就職活動報告会** 生活科学部本館306号室

各分野・業種に内定している10名の4年生が自身の就職活動経験を述べ、後輩へのアドバイスをした。参加者は約65名であった。

18:40～20:30 **ピアサポート交流会**

ピアサポート実行委員が中心となり机と椅子の並び替えをして交流会が開催された。各テーブルには最低2名程度の4年生に座ってもらい、1、2、3年生は自由にテーブル間を動けるようにした。目的は4年生の就職活動経験を自由なおしゃべりをしながら聞くことであった。4年生と後輩たちとの交流の場として非常に良い機会となった。交流会終了後参加者に簡単な感想を書いてもらったが、「4年生の先輩の話が聞けるなんてめったにないのでとても貴重な機会でした。」「就活の話以外にも、ゼミや授業の話を聞くことができ大変良かったです。」などの多くのポジティブなコメントが寄せられた。

- 2006年11月1日 **第四回実行委員会**

10月18日のピアサポート交流会の反省や感想などについて参加者のコメントも交えて話し合った。今後もこのような機会を持ちたいとの意見が出された。12月のクリスマスパーティについての計画をした。更に1月18日にゼミ生によるインフォーマルなゼミオリエンテーションをすることを決めた。

- 2006年12月6日 **第五回実行委員会**

12月14日のクリスマスパーティの準備の担当を決めた。学生によるゼミオリエンテーションの計画も立てた。

- 2006年12月14日 **ピアサポートクリスマスパーティ**

2006年最後の交流会としてクリスマスパーティを行った。ケーキを含む軽食を食べながら学年を超えてのおしゃべりを楽しんだ。交流会も3回目となり全員和気あいあいのもとに交流を楽しんだ様子であった。この会の参加者は年末も押し迫ってきているためか約40名と前回より幾分少なかった。

- 2007年1月18日 **ピアサポートインフォーマルゼミ紹介**

18:30～20:30 生活科学部本館306号室

現在準備中であるが、計画としては各ゼミの先輩からの話を最初にしてもらい、その後テーブルを各ゼミごとに設定して茶菓子を食べながら更に詳しいゼミの話の聞くということになっている。

就職活動報告会 (2006年10月18日)



クリスマスパーティ (2006年12月14日)



3. 今年度の活動から得られたことと今後への提案

2006年度の様々なピアサポート活動から得られたことは主に2点ある。第一に学年を超えての交流はアカデミックと生活の両面で学生にプラスになるということだ。普段は同学年の中だけでの交流に留まってしまうがちであるが、ピアサポート主催の交流会を通して先輩や後輩の話を聞くことは、アカデミックや生活に関する情報交換や学年を超えた友人を作るなど学部生にとって非常に有益なことが多かった。第二にピアサポートという学生主体の活動を通して、学生自身がリーダーシップの役割を与えられることはとても貴重な経験であると思う。今後の課題のひとつとしてはいかに学生にピアサ

ポートの重要性を理解してもらいこの自主活動に積極的に参加してもらうことである。この点に関しては数名のピアサポート実行委員に2年間継続して委員になってもらうことや、ピアサポート実行委員経験者に第一回実行委員会に出席してもらいそこで前年度の活動などについての報告や今後への提案をしてもらうことも考えられる。今後もピアサポートプログラムの重要性を教員と学生によく理解してもらい、この素晴らしい交流の機会を継続していくことが望まれる。最後に以下の2006年度生活社会科学講座ピアサポート実行委員の皆さんの努力と奉仕精神に感謝をする。

(生活社会科学講座ピアサポート実行委員メンバー：大野杏子、武市典子、鉄志学、浦邊織奈、斎藤花衣、豊嶋真己子、西村優子、市川明矢子、廣瀬明子、堀江富美、山田晶子)

生活文化学講座ピアサポート

平成 17 年度

助教授 宮内 貴久
(生活科学部・生活文化学講)

生活文化学講座ではピアサポートとして、平成 17 年度は、博物館や祭礼の巡見、就職報告会、卒業論文中間発表会、卒業論文発表会などを行った。

6 月 30 日には江東区門前仲町にある富岡八幡宮で行われた、茅の輪くぐり行事を見学し、閻魔堂と深川不動尊を巡見した。

7 月 2 日には東京都小金井市の江戸東京たてもの園で、高橋是清邸・伊達家の門など歴史的な人物が住んだ邸宅、農家、町家など庶民の住まい、銭湯などの見学を行った。

7 月 21 日には中央区月島で、下町の街並みの見学を行い、つづいて銀座で服飾に関する考現学的調査を試みた。

10 月には卒業論文の中間発表会を行い、三四年生だけでなく、二年生も多数参加し活発に質問・発言をしていた。

2 月には卒業論文発表会終了後に、就職報告会を行った。四年生が就職活動について、苦労した点や工夫した点などを具体的に報告した後、下級生が活発に質問していた。

参考写真入る

平成 18 年度

教授 徳井 淑子
(生活科学部・生活文化学講座)

平成 18 年度には、美術館の展覧会見学、学習と大学生活に関する懇談会、および就職活動に関する座談会を行った。

18 年度には幸いフランス服飾・文化を知るためのたいへんよい展覧会があり、5 月 28 日（日曜日、12 時半～15 時）には江戸東京博物館の特別展「ナポレオンとヴェルサイユ展」を見学、および 5 月 31 日（水曜日、15 時 40 分～17 時）には文化学園服飾博物館の特別展「異国趣味：ヨーロッパ・ファッションにみるエキゾチシズム」を見学した。参加者は 1 年生から 3 年生まで 10 名ほどであり、それぞれの学年が授業の内容に応じた興味で観覧し、上級生が下級生へ説明をする機会もあり、授業の補習として有益であった。

11 月 17 日（金曜日、18 時～20 時）には、2 年生のピアサポート実行委員が中心となり、学外の場所を使って授業や演習、就職活動などの情報交換を行う会合をもった。参加者は 1 年生が 3 名、2 年生が 8 名、3 年生が 3 名、合計 14 名であり、大学生活に関わるさまざまな話題を通して学年を越えた交流ができた。

12 月 18 日（月曜日、16 時 50 分～19 時）には、共通講義棟 1 号館 203 室にて、4 年生が中心となり、就職活動と内定者の座談会を開いた。1 年生から 4 年生まで約 30 人が集まり、就職についての情報交換が行われ、今後、就職活動を行う下級生にはきわめて有益な会合となった。

2005 年度 留学生相談室活動報告

チューター長

(人間文化研究科国際日本学専攻博士後期課程 2 年)

2005 年度の留学生相談室活動内容について、日常支援活動と留学生関連行事に分けて報告する。

1. 日常支援活動

前年度までと同様に、平日 10 時から 17 時まで大学院生によるチューター 2 名が勤務し、来室した留学生に様々な支援活動を行った。以下では、2005 年度の利用状況と合わせて活動報告を行う。

(1) 開室日

前期 4 月 5 日～8 月 5 日 後期 8 月 25 日～2 月 28 日

※8 月は夏季休暇のため閉室予定であったが、留学生より開室希望の声が多かったため、8 月 1～5 日、25～31 日を特別開室日とした。

(2) 利用者

2005 年度の 1 年間に相談室を利用した留学生数は、2,672 名であった。所属別では、研究生 (22%) と学部生 (21%) がもっとも多く、修士の院生 (16%)、博士の院生 (13%)、日研生 (13%)、交換留学生 (6%) と続いた。学部生 21% の所属学部は、文教育学部 18%、生活科学部 3%、理学部は 0% であった。留学生の学部所属状況を反映しているとも考えられるが、理系の留学生に向けて相談室利用の呼びかけを行っていくことが課題となった。

(3) サポート内容

相談室におけるサポートの中心となるのが、日本語添削活動である。2005 年度も、授業のレポートから、修士論文、博士論文、投稿論文、研究計画、ゼミでのレジュメ、メール、手紙、など幅広い添削活動が行われていた。長い論文の場合は添削に時間がかかるため、何度も訪れる留学生の姿も多く見られた。

日本語添削活動以外に、大学生活や日常生活面の相談活動も行われていた。図書館や情報センターなどの学内施設の利用、履修登録や授業の参加の仕方、大学周辺や東京の買物・生活事情など、実に幅広い相談があった。これらは、チューターとの日常的やりとりの中から自然に出されることがほとんどであった。その場で対応できない場合、他のチューターに相談したり学内の担当機関に問い合わせたりして、次につなげることを心がけていた。

また、留学生相談室には、インターネットに接続可能なパソコン 7 台とプリンタ 4 台が

あり、多くの留学生がメール、レポート作成、インターネット閲覧などのために、パソコンを利用していた。実際、留学生の来室目的としてもっとも多いのがパソコン利用である。毎日、決まった時間にパソコン利用に訪れる留学生も見られた。レポートや発表資料作成途中でチューターに質問・相談を行う留学生も多く、場所や機材の提供にとどまらない支援を行えたと考える。

その他、相談室の向かいには、留学生が飲食しながら交流のできるスペース「控え室」があるが、この控え室の利用も多かった。昼休みには、毎日、多くの留学生でにぎわっていた。留学生が安心して時間を過ごし、気軽に情報交換できる場所として機能していたと考えられる。

2. 留学生関連行事

4月13日 前期留学生オリエンテーション

*相談室の紹介、及びオリエンテーション終了後のキャンパスツアーを行った。

6月8日 歌舞伎鑑賞

*チューター2名が引率

7月6日 留学生懇談会

*司会、受付、余興を担当

8月6～24日 夏季休暇

9月21～22日 留学生見学旅行（平泉・松島）

*チューター3名が引率

10月11日 後期留学生オリエンテーション

*前期同様、相談室紹介とキャンパスツアーの実施

3. 運営の様子

チューター長（堀川）を含む3名の運営メンバー（野本梨沙さん、岩崎ちひろさん）によって全体の運営活動が行われた。また、前年度までと同様に、チューター全員が、会計備品、統計、室内美化、などの係を受け持ち、協力しながら相談室の運営を行った。チューター間の連絡は、引継ぎノート、メーリングリストを活用して行っていたが、2005年度は、新たに「チューター日誌」を導入し、特に連絡事項のない日であっても各チューターの活動の様子をチューター間で共有できるようにした。

2005年度は留学生チューターの数が多かったが、留学生の母語で対応できる留学生チューターは、利用者の留学生と日本人チューターとのつなぎ役として心強い存在であった。留学生の率直な意見を聞き、相談室運営に反映させていくことが重要であると考えられる。

2006年度 留学生相談室活動報告

チューター長

(人間文化研究科言語文化専攻博士前期課程2年)

1. 相談室利用状況

(1) 利用者

2006年度の留学生相談室利用者数の統計(2006年4月から11月末現在まで)をみると、利用者数は1,910人であった。所属別の内訳は、最も多いのは修士課程の学生で30%、ついで学部生が21%、以下は研究生が17%、博士課程の学生、日研生7%、交換留学生6%と続く。幅広い利用者層があることと、修士・博士課程の学生を合わせると37%と、3割を超えることから、相談室のサポート体制が学部生だけでなく、より高度な研究を進める院生のニーズにも合っているものであることが窺える。

(2) サポート内容

相談室で行っているサポートは、生活相談やレポート等の日本語の添削、パソコン利用の補助、DVD視聴サービスや本の貸し出しなどであるが、そのなかでもっとも利用が多かったのはパソコンの利用であった。パソコン利用者数は、全体で述べ1,284名おり、全体からすると67%を占める。また、パソコンの利用について、wordやexcelを使ったレポート作成における質問や、日本人に送るメール文の内容チェックなどの依頼も多いことから、気軽に質問ができるチューターがいる相談室でのパソコン利用が留学生にとって頼りになる存在であることが窺える。

2. 2006年度留学生相談室行事

4月12日 留学生オリエンテーション(前期)

*オリエンテーション後、留学生10名程度のグループに分かれて図書館、情報処理センター、国際交流課、国際教育センター、生協など、お茶大の主要な建物を紹介するキャンパスツアーを行った。

6月14日 歌舞伎鑑賞会

7月5日 留学生懇談会

*チューターはteaや日研生に呼びかけ、全体のプログラム作成、ポスター、作成、司会進行、当日の受付などを担当した。また、チューター有志による歌と演奏を行った。

8月1日～7日、8月25～9月14日 夏季休業中の開室

* 2006年度は、相談室利用者の留学生やチューターへの事前調査を行い、希望を聞いた結果、相談室利用のニーズが高かったことから、前年度同様、一人勤務日（通常は二人勤務）を設けることで特設開室日を増やした。大学の講義がない期間であるため、通常開室期間中と比べると利用者は少ないが、自宅にパソコン・プリンターを持っていない留学生へのサポートや、休暇中相談できる相手がいない留学生へのサポートが可能となった。

10月11日 留学生オリエンテーション（後期）

* 前期留学生オリエンテーション時同様に、オリエンテーション後にキャンパスツアーを行った。

3. 活動運営の様子

（1）チューターのメーリングリスト

相談室チューターは全員が顔を合わせる機会が少ないため、イベントや連絡事項などの情報伝達や日常のサポートにおいて、全体に知らせるツールであるメーリングリストが活用されている。メーリングリストには顧問の加賀美先生、曜日チューター、サブチューターが全員登録され、伝達事項だけでなく、相談室運営において、気になったことや、疑問・意見などをいつでも投稿できるようになっている。具体的に挙げた例として、2006年度は、相談室内のゴミ箱の設置や、相談室に置いてほしい本のリクエスト、留学生への対応の仕方などであり、これらの発言に対しては、チューターからの提案が盛んにメーリングリストに流れた。また、留学生サポートの視点から加賀美先生にアドバイスをいただくことで、改善を試みることもできた。

（2）運営の感想

留学生相談室の運営を支える院生チューターは、これまで留学生との交流をあまり持たなかった人も多い。しかし、活動を続けていく中で、「留学生に自然に声をかけられるようになった」「異文化に興味を持った」「自分のことについて内省するきっかけを得た」等の意見がよく聞かれる。学内には大勢の留学生がいるが、同じ研究室に属していない限り、留学生と交流を深める機会は多くないだろう。先のチューターの発言からは、留学生相談室が、留学生へのサポートの提供だけにとどまらず、チューターにとっても留学生から刺激を得て、学ぶ場となっていることがわかる。相談室はまさに、ピア・サポートの場であるといえよう。

第5期（2006年4月～現在）活動報告

TEA 代表 理学部 2年

TEA 副代表 文教育学部 2年

4月12日 留学生オリエンテーション・留学生歓迎パーティ

留学生オリエンテーション終了後、ケーキやお菓子を用意し、留学生歓迎パーティを行いました。自己紹介や歓談を通して皆仲良くなれたと思います。

5月9日 第1回文化交流会 ベルギー紹介

5月16日 第2回文化交流会 台湾紹介

5月28日 歓迎会

池袋でパキスタン料理を楽しみました。日本人学生6名留学生4名計10名と参加人数は少なかったのですが、かえって親しく話せ、交流できたという参加者の声がありました。

5月30日 第3回文化交流会 インドネシア紹介

6月6日 第4回文化交流会 ベトナム紹介

6月13日 第5回文化交流会 北海道紹介

6月20日 第6回文化交流会 韓国紹介

6月27日 第7回文化交流会 横浜紹介

6月28日 フランス語講座

TEAの活動の新たな取り組みとして、留学生による語学講座を開きました。ベルギー出身でフランスの大学に籍を置く留学生にフランス語での簡単な挨拶や数などを教わりました。

7月1日 TEA料理会

南大塚の市民センターを借り、パスタサラダ、お好み焼き、味噌汁を作りました。参加者は日本人学生4名留学生4名計8名でした。

7月19日 イタリア語講座

留学生の語学講座第2弾を行いました。イタリア出身でイギリスの大学に籍を置く留学生にイタリア語での自己紹介や男性名詞と女性名詞について教わりました。

7月5日 留学生懇談会

毎年行われる大学主催の交流行事です。7月に行われるため、TEAメンバーの間では「七夕会」という呼び方が定着してしまいました。TEAは今年、氣志團のワンナイトカーニバルを踊りました。授業の合間をぬって練習するためなかなか参加者全員は集まれません、4月から新たにTEAに加わったメンバーと仲良くなる機会でもあります。

8月4日 留学生送別会

大学構内にて行いました。日本人学生5名留学生7名（学部生1名帰国者6名）計12名参加しました。

10月11日 留学生オリエンテーション・留学生歓迎パーティ

ポスターにて学内に留学生歓迎パーティがあることを告知したところ、1年生もたくさん参加してくれました。

10月25日、11月1・8日 東京近郊オススメスポット紹介

文化紹介のような昼休みに行く企画が後期にもあったほうがいい、観光スポットの穴場を知りたいとの意見があり行いました。毎回15名以上の参加がありました。

11月11日・12日 德音祭

今年は中国直輸入の食材店で仕入れた胡麻団子とピーナッツ団子を販売しました。白玉のような団子の中にそれぞれ胡麻餡、ピーナッツ餡が入っているもので、普通日本人が想像する胡麻団子と違い、それだけでも新鮮でした。今年は1日目雨、2日目強風と天候に恵まれませんでした。留学生にとっては学外の人と話せるチャンスでもあるように感じました。

11月25日・26日 第5回国際教育交流シンポジウム

今年は会場を埼玉にある国立女性教育会館に変えて行いました。参加者は日本人学生10名留学生14名、計24名。異文化シュミレーションゲーム、TEA2期副代表の石原翠さんによるTEAの活動をテーマとした卒論の発表を通し、国際交流を見つめなおすことができました。今年のグループ討論のテーマは「日本」、「リーダーシップ」、「大学」、「家族」でした。

1月12日 新年会

池袋にて行いました。参加者は日本人学生3名留学生4名、計7名でTEAメンバー（留学生）がアルバイトしている店に行きました。

感想・反省

TEAの活動も5年目を迎え、大きな行事は恒例化されてきました。さらに活動の幅を広げていく必要性もあると考え、語学講座、観光スポット紹介等新たな企画にも試みています。しかし、学内での行事に比重がいつってしまったため、昼休みのお昼を食べながら会話をするという日常的な活動が手薄になり、放課後の学外でのかかわりが生まれにくくなってしまったのは、反省点であり、来年度の課題です。

留学生が受身の存在ではなく、お互いに率直な意見を交わしあい、刺激しあう関係にあることがTEAの大きな特徴です。改善点は多々ありますが、この雰囲気は大切にしていきたいと考えています。